

インターネット公開許諾のない文章には墨消し処理を施しています。

話す者の心持

三枝樹正道

日曜教園に行はれる童話は必ず佛教の物語りでなければならぬ。云はぬが少くとも話すものゝ態度、気持ちに就いては念佛念法念僧の精神が漲つてをらねばならぬ。

念佛の態度とはその話を通じて自他共に眞實の佛道に精進する様に生活が導かれなければならぬ。語る間に話す者も聞く者も佛を慕はしく常に佛を中心としての活動が展開されるのでなければならぬ。

又念法の態度とは單にその話が興味中心のみに話されるのでなく、その興味を通じて正しき生活に進展するのでな

ければならぬ。興味が興味を呼び、遂に興味に停頓してその兒童の生活に正しき歩みが現れて來ないならば、それは誤りである。このこゝは常に偶話を話せよか又は話の最後に「ダカラ皆サンモ……」といふ言葉を述べよといふのではない。それは却つて話に嫌みを増し又悪くなるこゝ偶話の意味の反對の結果をさへ齎すものである。故に話の裡にその語る態度の裡に、自ら眞實正しき生活の曙光の表れて來るこゝを希念するのでなければならぬ。

最後の念僧の態度とはその話を通じて兒童の現在及將來の生活に和合の生活の將來さるこゝを希望するのである。凡ての人類が本來和合してこそ眞の文化も文明も現れるのである。争闘による文化の進歩を説くものもあるが平和を望む要求切なるものがあつてこそ争闘も發生するものであつて争闘それ自身が目的となるこゝはあり得ない。従つて出來る限りはこの争闘の手段を避くべきである。談笑の裡に萬事が解決して平和が平和の間に齎されてこそ最も望ましい結果である。佛教日曜教團に於て育てられたものは少くもこの争闘をさけて更に進んで平和、和合の生活がその將來に展開されなければならぬ。

要するに教團に於ける童話は興味あるお話でなければならぬのはその對象が理性の未だ發達せない兒童にして興味本位の生活を營んでゐるものであるこゝの理由からであつてその興味が目的であるのではない。又狂熱的な信者を作るのが目的でもないから徒らに過去の狂信者の熱烈な態度のお話でなければならぬ理由もない。然も凡て素直な純な子供心を完全圓滿な佛の慈悲の裡に健やかに成長せしめるこゝを念願するものでなければならぬ。これは何でもない様であるが話すものが自己中心では駄目だ。未だ至らざるこゝ多き吾人は自己判斷のみにては實に多く誤り勝ちである。だから話すもの自身が常に念佛念法念僧の心持ちにあつて、一ツ一ツの童話を取扱つて行くべきである。かくて話すものも聞くものも佛の慈悲の裡に健やかな成長が遂けられるのである。